

泉鏡花

星あかり

正規表現版・藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注・明治三一（一八九八）年八月発行の『太陽』に「みだれ橋」の標題で発表され。後の明治三十六年一月に春陽堂から刊行された作品集「田毎かぢみ」^{たごと}に収録した際、「星あかり」と改題された。

底本は岩波旧全集（巻四・一九四一年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗て大変お世話になった（[私の鏡花の俳句集のこちらのものは](#)、サイト主が贈って下さったものである）サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの（記憶では春陽堂版全集底本で、ルビに相違があるようであり、本文の異同もありそうである）を使用して戴いた。ここに御礼申し上げる。

踊り字「く」「ぐ」は生理的に嫌いなので、正字化した。

本篇は鎌倉の由比ガ浜近辺が舞台で、実は私は、「高野聖」に先立ち、高校一年の時、初めて、鏡花の作品として最初に読んだものである。その時は、専ら、鎌倉研究を手掛け始めた初期であったことと、その鎌倉を舞台にした漸層的な怪異の兆しから、コードで恐るべき事態が出来るといふ巧みな怪談趣味という噂に惹かれて読んだものであった（私は小学校二年時に小泉八雲の怪談奇談集を読んで以来、完全な怪談フリークと化していたのである）。主人公の止宿しているのは、[日蓮宗妙長寺](#)（グーグル・マップ・データ（以下同じ）。鏡花は冒頭「西鎌倉」と言っているが、「東」の誤りである）で、ここは私の父の実家にも近かったために親しみもあった。なお、初出の題名「亂橋」は鎌倉十橋の一つで[妙長寺の直近のここ](#)である（但し、現在は完全な暗渠）。実際、鏡花は明治二十三年の、七、八月にこの寺に、友人の医学生とともに避暑のために滞在している（作家を志望して上京した翌年で、この時、満十六であった）。謂わば、鏡花自身の実録風の怪談作品の一つとしても著名な短編であり、鎌倉と近代文学の関連作としては、まず、私は五本の指には挙げる小説である。そうした作品なれば、昔から、本篇の電子化注を何時かやろうと思ってきたのである。されば、今回は特異的に段落末に私の注をポイント落ちで附してある（最後のそれは同ポイントで注した）。

星あかり

もとより何故といふ理はないので、墓石の倒れたのを引摺寄せて、二ツばかり重ねて臺にした。

其の上に乗つて、雨戸の引合せの上の方を、ガタガタ動かして見たが、開きさうにもない。雨戸の中は、相州西鎌倉亂橋の妙長寺といふ、法華宗の寺の、本堂に隣つた八疊の、横に長い置床の附いた座敷で、向つて左手に、葛籠、革鞆などを置いた際に、山科といふ醫學生が、四六の借蚊帳を釣つて寝て居るのである。「やぶちやん注」四六四方幅が四対六の四畳用サイズの蚊帳。」

聲を懸けて、戸を敲いて、開けておくれと言へば、何の造作はないのだけれども、止せ、と留めるのを肯かないで、墓原を夜中に徘徊するのは好ん持のものと、二ツ三ツ言争つて出た、いまのさき、内で心張棒を構へたのは、自分を閉出したのだと思ふから、我慢にも待むまい。……

冷い石塔に手を載せたり、湿臭い塔婆を掴んだり、花筒の腐水に星の映るのを覗いたり、漫步をして居たが、藪が近く、蚊が酷いから、座敷の蚊帳が懐しくなつて、内へ入らうと思つたので、戸を開けようとすると思ひ切つたことに氣がついた。

それから墓石に乗つて推して見たが、原より然うすれば開くであらうといふ望があつたのではなく、唯居よりも、徒に試みたばかりなのであつた。

何にもならないで、ばたりと力なく墓石から下りて、腕を拱き、差俯向いて、ちつと
して立つて居ると、しつきりなしに蚊が集る。毒蟲が苦しいから、もつと樹立の少い、
廣々とした、うるさくない處をと、寺の境内に氣がついたから、歩き出して、卵塔場の
開戸から出て、本堂の前に行つた。

然まで大きくもない寺で、和尚と婆さんと二人で住む。門まで僅か三四間、左手は祠の
前を一坪ばかり花壇にして、松葉牡丹、鬼百合、夏菊など雜植の繁つた中に、向日葵の花
は高く蓮の葉の如く押被さつて、何時の間にか星は隠れた。鼠色の空はどんよりとして、
流るゝ雲も何にもない。なかなか氣が晴々しないから、一層海端へ行つて見ようと思つて、
さて、ぶらぶら。「やぶちゃん注」三三四間」約五メートル半から七メートル強。」

門の左側に、井戸が一個。飲水ではないので、極めて鹽ツ辛いが、底は浅い、屈んでさ
ぶざぶ、さるばうで汲み得らるゝ。石疊で穿下した合目には、此のあたりに産する何とか
いふ蟹、甲良が黄色で、足の赤い、小さなが數限なく群つて動いて居る。毎朝此の水
で顔を洗ふ、一杯頭から浴びようとしたけれども、あんな蟹は、夜中に何をするか分らぬ

と思つてやめた。「やぶちゃん注」さるばう」温泉などで見られる片方にだけ持ち手のついた桶。私は鉄面の一
種で、頬や顎を保護するものの形が左右から突き出した形になっている、その形状に擬えた命名ではないかと考えて
いる。「蟹」甲良が黄色で、足の赤い、小さな」というのは短尾下目イワガニ上科ベンケイガニ科アカテガニ属アカテ
ガニ *Chironomus haematocheir* と思われる。背部上方が黄色い個体はしばしば認められ、海岸・川辺の岩場は当然の如
く、土手・石垣・森林・湿地等に棲息し、カニ類の中でも乾燥にかなり適応した種として知られ、しかも幼生期以外に
は海水を必要としないが（寧ろ、水自体を嫌う傾向がある。ここでは、ロケ時間が夜で、その蟹は岩の隙間にうごめい
ていると描写しているのは、まさに夜行性の彼らに相応しいのである）、汽水域もフィールドとし、嘗つては、由比ガ
浜にも、多数、棲息していた（現在は、まず、観察出来ない）。この描写の条件だと、「小さな」というところから、短
尾下目サワガニ上科サワガニ科サワガニ属サワガニ *Geothelphusa dehaani* も候補となるのでは（背が黄色を帯び、鋏が
赤い個体もないではない）と思われる方もあるかも知れぬが、同種は本邦本土では数少ない純淡水産種であり、ここに

あるような塩分濃度の高い汽水域に群がっていることはない（鎌倉や私の住む大船は、幼少期はサワガニの宝庫だったが、今や、市街地では、まず、見かけることがなくなった）。また、イワガニ科イワガニ属イワガニ *Pachygrapsus crassipes* もいるが、ここが、やや海岸線から離れている点と、背・脚の色彩が全く合わないから、違う。」

門を出ると、右左、二畝ばかり慰みに植ゑた青田があつて、向う正面の畦中に、

琴弾松といふのがある。一昨日の晩、宵の口、其の松のうらおもてに、ちらちら燈が見え

たのを、海濱の別荘で花火を焚くのだといひ、否、狐火だともいつた。其の時は濡れたや

うな眞黒な暗夜だつたから、其の燈で松の葉もすらすらと透通るやうに青く見えたが、今

は、恰も曇つた一面の銀泥に描いた墨繪のやうだと、熟と見ながら、敷石を蹈んだが、カ

ラリカラリと日和下駄の音の冴えるのが耳に入つて、フと立留つた。「やぶちゃん注…当時のこの

附近の様子は「今昔マップ」のこちらで確認出来る。地図の中央に配した「卍」が妙長寺で、その門の先は、明治後期

の左の地図によつて、滑川左岸まで空き地（砂の多い土地で葦原であつた）であつたことが判る。川沿いから海側へ回り込んで田があるが、海波が強く潮が上がったりすると、潟や湿地に変じた。「琴弾松」は鎌倉の古名所としては、現在

の妙本寺のある山（古くは小御所山と呼ばれた。後に出る「比企ヶ谷」の北方西側のピーク）の滑川左岸近くの高みに「琴弾きの松」があつて、それに由來して滑川に「琴弾橋」も架けられてある（ここ）ものの、ここはロケーション

位置よりも有意に北の方であつて、明治時代には、その松も枯れて存在せず、凡そ位置が合わない（近代の名所案内にも松自体はドットされていない）。この松は田の畦道に生えた松に、その旧名跡の呼称を体よくつけたに過ぎないものである。なお、妙長寺の地図を拡大すると、音松稲荷社というお詠え向けの稲荷社があるのだが、私も一度行つてみた

ことがあるのだが、およそこれ、古いものではなかった。そもそも鏡花も「畔中」と謂い、稲荷の祠でもあるなら、それを使わない手はないから、ただの畔端の松に過ぎない。調べた限りでは、昭和初期よりも前には、この稲荷社の存在

自体が認められないようである。「別荘」由比ガ浜での別荘は、早期には滑川の右岸海浜で始まっているから、松の葉蔭から対岸の花火のそれがちらつくというのは、不自然ではない。なお、言つておくと、以下の話は、暫く、この妙長

寺から海岸に向かう寺の前の南北の道がロケーションとなるが、この道は上の地図にある通り、「小町大路」である。これは鎌倉時代の正式名で、若宮大路の東側を鶴岡（地名は「雪の下」。後で本文に出る）まで貫通していた東サイド

の大路であつた。現在の駅直近から西方に延びるうざうざとした「小町通り」は、その反対側の大路名を剽窃したに過ぎない近代の敷設路である。」

門外の道は、弓形に一條、ほのぼのと白く、比企ヶ谷の山から由井ヶ濱の磯際まで、斜

に鵲の橋を渡したやう也。

ハヤ浪の音が聞えて来た。

濱の方へ五六間進むと、土橋が一架、並の小さなのだけれども、滑川に架つたのだの、

長谷の行合橋だのと、おなじ名に聞えた亂橋といふのである。「やぶちゃん注…「五六間」九メー

トルから約十一メートル。「滑川に架つたのだの」この直近では、下馬四ツ角南方で佐助川が滑川に合流する直前に架かつていた琵琶橋。ここは旧小路名が由来。現在は暗渠。「長谷の行合橋」ここ。但し、「長谷」は誤りで、「七里ヶ浜」。

日蓮の龍ノ口法難（文永八（一二七一）年九月）の際、奇瑞・異変が起こったことを知らせる伝令と、幕府からの直前の斬罪赦免（時宗の妻が懷妊していたため、悪僧とはいえ、僧殺しを嫌ったために過ぎない。一等減ぜられて佐渡流罪となった）を伝える使者が行き合ったのが由来。「亂橋」は古川いう小流れに掛かつていた。実は現在の「亂橋」の碑が建つ道の向かい側に、溝と化した一部分が少しの区間だけ露出しているのである。ブルー・ストリート・ビューでその開始点を見せる。四十数年前、それを見つけた時、この小説のこのシーンを思い出して、私は、何か、ひどく淋しい気になったのであった。橋名は不詳（幕府滅亡の際に幕府の軍勢が乱れ始めた場所というのは嘘。「吾妻鏡」に既に名が出る）。

此の上で又立停つて前途を見みながら、由井ヶ濱までは、未だ三町ばかりあると、つく

づく然う考へた。三町は蓋し遠い道ではないが、身體も精神も共に太く疲れて居たから。

「やぶちゃん注…「三町」三百二十七強メートル。現在、「乱橋」跡から材木座海岸までは、五百七十メートル以上ある。当時の海岸線は、現在よりも、もっと有意に内陸にあったのである。」

しかし其まゝ素直に立つてるのが、餘り辛かつたから又歩いた。

路の兩側しばらくのあひだ、人家が斷えては續いたが、いづれも寢靜まつて、白けた

藁屋の中に、何家も何家も人の氣勢がせぬ。

其の寂寞を破る、跼音とが高いので、夜更に里人の懷疑を受けはしないかといふ懸念か

ら、誰も咎めはせぬのに、拔足、差足、音は立てまいと思ふほど、なほ下駄の響が胸を打

つて、耳を貫く。

何か、自分はず世の中の一切のものに、現在、慙く、悄然、夜露で重ツくるしい、白地の

浴衣の、しほたれた、細い姿で、首を垂れて、唯一人、由井ヶ濱へ通ずる砂道を辿ることを、見られてはならぬ、知しられてはならぬ、氣取られてはならぬといふやうな思ひであるのに、まあ！ 廂も、屋根も、居酒屋の軒にかゝった杉の葉も、百姓屋の土間に据ゑてある粉挽臼も、皆目を以て、じろじろ睨めるやうで、身の置處ないまでに、右から、左から、路をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなつて、おどおどして、其癖、驅け出さうとする勇氣はなく、凡そ人間の歩行に、ありツたけの遅さで、汗になりながら、家々のある處をすり抜けて、やうやう石地藏の立つ處。「やぶちゃん注…！」の後に底本では字空けはない。次の次の段に現われるそれも同様である。「石地藏」恐らくは浄土宗九品寺（くほんじ）参道入口にあったものと思う。現在もあるが、新しい（グーグル・ストリート・ビュー）。同寺は関東大震災で全壊している。所持する書物では、それ以前の写真を見出すことが出来なかった。」

ほツと息をすると、びやうびやうと、頻に犬の吠えるのが聞えた。

一でない、二でもない。三頭も四頭も一齊に吠え立てるのは、丁ど前途の濱際に、また人家が七八軒、浴場、荒物屋など一廓になつて居る其あたり。彼處を通抜ねばならぬと思ふと、今度は寒氣がした。我ながら、自分を怪しむほどであるから、恐ろしく犬を憚つたものである。進まれもせず、引返せば再石臼だの、松の葉だの、屋根にも廂にも睨まれる、あの、此上もない厭な思をしなければならぬの歟と、それもならず。静と立つてると、天窓がふらふら、おしつけられるやうな、しめつけられるやうな、犇々と重いものでおされるやうな、切ない、堪らない氣がして、もはや！ 横に倒れようかと思つた。

「やぶちゃん注…以上のシークエンスは先の九品寺から材木座海岸に抜ける街路の雰囲気と今もよく一致する。ストリート・ビューを見られると判るが、八百屋・飲屋・洗濯屋・魚屋・喫茶店・薬屋・蕎麦屋等が左右に有意に並ぶのであ

る。この道全体が私の実家から材木座海岸に海水浴に行く時の昭和三八（一九六三）年来の馴染みの道であり、光る海が今も遠くに見えるのが脳裏に刻まれていて懐かしい。なお、ここでの主人公は、前の段落から認められるように、明らかに神経症的で軽い関係妄想が生じていることが感じられ、そこからは、特に犬を媒介とした一種の追跡妄想さえも認められる病跡学的には興味深いシークエンスである。』

處へ、荷車が一臺、前方から押寄せるが如くに動いて、來たのは頬被をした百姓である。

これに夢ゆめが覺めたやうになつて、少し元氣がつく。

曳いて來たは空車で、青菜も、藁も乗つて居はしなかつたが、何故か、雪の下の方市に行くのであらうと見て取つたので、なるほど、星の消えたのも、空が淀んで居るのも、

夜明に間のない所爲であらう。墓原へ出たのは十二時過、それから、あゝして、あゝして、

と此處まで來た間のことを心に繰返して、大分の時間が経つたから。「やぶちゃん注…ストリート・ビューで見ると、少なくとも八百屋或いは青物を扱っている店は、同画像の現在でも三つを数える。この辺りから東方は、既に作品当時、外国人の別荘や避暑・海水浴のための貸別荘が建ち、相応に繁華な場所であつた。今、主人公が歩海に向かって歩いているが、海岸に出る手前で、向かつて左に道がカーブすると、知られた西山浄土宗総本山光明寺がある。夏目漱石の「こゝろ」の冒頭が、まさにこの材木座海岸であるのも、この寺の奥にあった貸別荘に、夏のそれとして、漱石が家族を連れて何度か來た体験に基づくのである。私の『東京朝日新聞』初出の復元注「[心先生の遺書（一）（三十六）](#) [附♡やぶちゃんの摺み](#)」の（三）の注を参照されたい。なお、この「小町大路」は鎌倉時代から、小坪を経由して三浦に通じる物資輸送の要衝で、「小坪道」とも呼び、材木座海岸の東の飯島が崎に北条泰時が築港した「和賀江島」（鎌倉時代唯一の本格的な大型築港跡。貞永元（一二三二）年竣工）の建造以降、宋からの貿易船も入港し、特に相當に繁昌した場所だったのである。建長三（一二五二）年及び文永二（一二六五）年に幕府が定めた町家を構えても構わない場所の一つに指定されている。ここは、相応に、古き鎌倉の由緒ある場所なのである。」

と思ふ内に、車は自分の前、ものゝ二三間隔たる處から、左の山道の方へ曲つた。雪の下へ行くには、來て、自分と摺れ違つて後方へ通り抜けねばならないのに、と怪しみがら見ると、ぼやけた色で、夜の色よりも少し白く見えた、車も、人も、山道の半ばあたりでツイ目のさきにあるやうな、大きな、鮮な形、ありのまゝ衝と消えた。「やぶちゃん

注…「二三間」三・七・五・五メートル弱。「左の山道」主人公から見て「左」で、東に相当する。恐らくは、補陀洛寺（私の非常に好きな寺だが、観光ルートからは外れるため、見逃されることが多い。文覚上人裸像や平家の赤旗は一見の価値、大いに有り、である。私は二十歳の頃、自由に拝観させて貰い、甚だ感激した）を経て、弁ヶ谷へ迎う道と思うが、主人公の言う通り、これは現在でも谷戸のどん詰まりに向かう道であり、朝売りの農作物を採りに行くものか、ともかくも、ちよつと不審ではある。[先の「今昔マップ」](#)で示す。両地図の左中央の「卍」が補陀洛寺で、その奥は入ったこの西方向を除く三方が、今も丘陵地であることが判る。」

今は最う、さつきから荷車が唯いつてあるいて、少しも轆轤の音の聞えなかつたことも念頭に置かないで、早く此の懊惱を洗ひ流さうと、一直線に、夜明に間もないと考へたから、人憚らず足早に進んだ。荒物屋の軒下の薄暗い處に、斑犬が一頭、うしろ向に、長く伸びて寝て居たばかり、事なく出たのは由井ヶ濱である。「やぶちゃん注…「轆轤」荷車や馬車などが音を立てて走るさま。その音が聴こえなかつたというのもそれほど怪異なことではない。既に述べた通り、この辺りは古くは砂丘であつたから、砂地が多いのである。ここにも神経症的気分が感じられる。」

碧潮金砂、晝の趣とは違つて、靈山ヶ崎の突端と小坪の濱でおしまはした遠浅は、暗黒の色を帶び、伊豆の七島も見ゆるといふ蒼海原は、さゝ濁に濁つて、果なくおつかぶさつたやうに堆い水面は、おなじ色に空に連つて居る。浪打際は綿をば束ねたやうな白い波、波頭に泡を立てゝ、だうと寄せては、ざつと、おうやうに、重々しう、翻ると、

ひたひたと押寄せるが如くに來る。これは、一秒に砂一粒、幾億萬年の後には、此の大陸を浸し盡さうとする處の水で、いまも、瞬間の後も、咄嗟のさきも、正に然なすべく働いて居るのであるが、自分は餘り大陸の一端が浪のために喰缺かれることの疾いのを、心細く感ずるばかりであつた。「やぶちゃん注…「靈山ヶ崎」稲村ヶ崎の別称。私はこの呼称の方が好きだ。

「小坪の濱」これは現存しない。「今昔マップ」で見えて貰おう。現在の小坪の埋め立て地はなく、飯島（旧地図では「飯嶋」）を通して、小坪の鷺ヶ浦（現在の「小坪マリーナ」の手前の小坪海岸及び小坪港）を越えて逗子の大崎までが、辺縁を含んだ由比ヶ浜を含む湾内であることが判る（但し、由比ヶ浜自体は西端を稲村ヶ崎、東端を飯島ヶ崎とす

る)。岩場の続く飯島を越えた向こうの海岸線の砂浜海岸は、当時でも材木座海岸からは全く見えなかったはずであるから、ここで主人公の言っているのは、漠然とした材木座海岸の東端をかく言っているところべきである。仮に干潮であれば、「和賀江島」が露出し（山岩を多量に投げ込んで作った原始的な船泊りであるが、周辺に砂地がある）、見ようによつては「濱」と言つても違和感はない。」

妙長寺に寄宿してから三十日ばかりになるが、先に來た時分とは濱が著しく縮まつて居る。町を離れてから浪打際まで、凡そ二百歩もあつた筈なのが、白砂に足を踏掛けたと思ふと、早や爪先が冷く浪のさきに觸れたので、晝間は鐵の鍋で煮上げたやうな砂が、皆ずぶずぶに濡れて、冷こく、宛然網の下を、水が潜つて寄せ來るやう、砂地に立つても身體が搖ぎさうに思はれて、不安心でならぬから、浪が襲ふとすたすたと後へ退き、浪が返るとすたすたと前へ進んで、砂の上に唯一人やがて星一つない下に、果のない蒼海の浪に、あはれ果敢い、弱い、力のない、身體單個弄ばれて、勿返されて居るのだ、と心付いて慄然とした。

時に大浪が、一あて推寄せたのに足を打たれて、氣も上ずつて蹣跚けかゝつた。手が、砂地に引上げてある難破船の、纔かに其形を留めて居る、三十石積と見覚えのある、其の舷にかゝつて、五寸釘をヒヤヒヤと攪んで、また身震をした。下駄はさつきから砂地を驅ける内に、いつの間にか脱いでしまつて、跣足である。「やぶちやん注…「三十石積」の舟のサイズは、[ネットの「精選版日本国語大辞典」の「三十石船」の解説に添えられた図がよい。](#)」

何故かは知らぬが、此船にでも乗つて助からうと、片手を舷に添へて、あわたいしく擦上らうとする、足が砂を離れて空にかゝり、胸が前屈みになつて、がつくり俯向いた目に、船底に銀のやうな水が留つて居るのを見た。

思はず、あツといつて失望した時、轟々轟といふ波の音。山を覆したやうに大敵が來たとばかりで、——跣足で一文字に引返したが、吐息もならず——、寺の門を入ると、其處まで隙間もなく追縋つた、灰汁を覆したやうな海は、自分の背から放れて去つた。

引息で飛着いた、本堂の戸を、力まかせにがたひしと開ける、屋根の上で、ガラガラといふ響、瓦が残らず飛上つて、舞立つて、亂合つて、打破れた音がしたので、はツと思ふと、目が眩んで、耳が聞えなくなつた。が、うツかりした、疲れ果てた、倒れさうな自分の體、……夢中で、色の褪せた、天井の低い、皺だらけな蚊帳の片隅を掴んで、暗くなつた灯の影に、透かして蚊帳の内を覗いた。

醫學生は肌脱で、うつむけに寢て、蹈返した夜具への上へ、兩足を投懸けて眠つて居る。ト枕を並べ、仰向になり、胸の上に片手を力なく、片手を投出し、足をのばして、口を結んだ顔は、灯の片影になつて、一人すやすやと寢て居るのを、……一目見ると、其は自分であつたので、天窓から氷を浴びたやうに筋がしまつた。

ひとと冷い汗になつて、眼を睜き、殺されるのであらうと思ひながら、すかして蚊帳の外を見たが、墓原をさまよつて、亂橋から由井ヶ濱をうろついて死にさうになつて歸つて來た自分の姿は、立つて、蚊帳に縋つては居なかつた。

ものゝけはひを、夜毎の心持で考へると、まだ三時には間があつたので、最う最うあたまがおもいから、其まゝ黙つて、母上の御名を念じた。——人は恸ういふことから氣が違ふのであらう。

「やぶちゃん注：最後の最後、恐るべき遭遇としての、二重身、ドッペルゲンガー (Doppelgänger) 譚である。早くに、ある精神科医は病跡学的にこれを「離人症」と指摘していた（その本或いは論文雑誌を所持しているのだが、書庫の底に沈没してしまい、見出せない）。所謂、今で言う「解離性同一性障害」である。鏡花自身の実際の経験であるかどうかは定かででないが、ドッペルゲンガーの近代小説の嚆矢として、非常に優れた幻想小説であることは疑いない。細部の積み重ねの映像描写はリアリズムに富んでいながら、知らず知らずの内に、否応なしに鏡花的奇界へと導いてゆくこの手法は、やはり、他に類を見ない。私が本邦の近現代文学に於ける唯一と言ってもよい真正の幻想文学作家として彼に惹かれる所以である。なお、空前絶後の幻想譚「高野聖」が発表されるのは、本篇発表から一年半後の明治三三（一九〇〇）年二月（『新小説』であった。」